





ノーベル平和賞で核廃絶をたたかうICANが受賞したこととあわせて、今年のノーベル賞は核戦争がテーマであったが、被爆都市・長崎の市民は、この廃絶のたたかいの先頭でたたかうことが求められている。

長崎では多くの人は身内が殺され、いまなお、被爆者として苦しんでいるからだ。そしてなによりも原爆の実態と怖さを知る世代が「被爆者」として生きている時代に、必ず核廃絶を実現すると、原爆で殺された人々への約束であるからだ。

六である。

この労組は、総評系と同盟系が合同した多数派連合労組が、解雇などをたたかわないことに怒り、分裂し結成された労組（百二十名）だ。彼らは地区労に加盟し、地域の仲間とたたかっている。

しかし会社は、協調主義の連合からの脱退に怒り、この労組の権利と存在を認めず、不当な差別を続けている。法も労働委員会も無視し、ユニオンつぶしを続ける長崎バス会社を糾弾し、ぜひともにたたきたい。

七つである。

労契法裁判とともに、郵政の職場が激変し、混乱している。郵政が裁判に勝つために、表面上の決まりなどを変えたからだ。

一つに、一般職の設置で正社員化への希望の芽を摘み取ったこと。また五年超の有期雇用者の無期転換、さらにアソシエイト社員への病気休暇の年間九〇日への変更。あるいは年賀はがきの目標の設定の仕方の変更（個人から班単位）である。自爆営業などの批判を浴びた結果だが、自爆的な競争が班単位で、あるいは班内部での個人攻撃的になることが懸念されている。

しかし裁判対策的にとられたことだが、非正規社員のクレーン対応義務から、上司への報告義務に変更したと



あるが、これには疑義があり、

実際の仕事の事態を無視した裁判に勝つためにだけの言葉の書き換えである。

事故でのクレーンの解決の責任は、現場担当者の全員にあることは間違いない。顧客には正社員も非正規社員も郵便局であり、身分に関係なく全員、その場で解決を迫られる。これからみても両者は同じ仕事と責任をもつ。これが現実だ。であるならば会社は同じ仕事と責任を認めて、同一労働として、非正規の格差をなくすことが正しいのだ。

八つである。

ユニオンは少数組合であり、人も金も力も足りない。そこで頼りは退職者組合（シルバーユニオン）である。彼らは退職しても支部に組合費を払い続け、支援してくれる。そ

のシルバーが結成十年を記念し、「十周年記念誌」を発行し、併せて、支部の中島さんが書いた「郵政全労協結成前後」（外史）の歴史本と、労働界再編時に争われた反連合、全労協の組織戦と「転向論」をまとめた本を出した。外史は全組合員へ配布済みだが、記念誌は支部に一部しかなく、書記局においてある。目を通していただければ、先輩たちの思いが伝わると思う。

九つである。

郵政ユニオンは二〇一二年七月に全労連の郵政産業労働組合（郵産労）と全労協の郵政労働者ユニオン（郵政ユニオン）が、労働界再編で別れた三つのナショナルセンターの枠を超えて統一した労組である。

両社は一般的にいうと水と油の関係であり、とても一緒にはやれないと思われる労組であったし、事実、対立は現場に多くあった。これをいったん脇に置き、まず統一した組織である。実験といえば大げさだが統一は五年間もち全労協と全労連の両者と良好な関係を維持している。

しかし統一物語はここで完結してはならない。日本の左派の労働運動と組織のありよう、一石を投じた郵政ユニオンの統一である。「変わり者



同意の統一」としてではなく郵政内の対立同士が協調できていると前向きにとらえ、これに続く労組が出てこなければ、郵政ユニオンの五年間は、成果とはならない、労働運動自体の大きな損失である。

統一から五年目に、全労連と全労協双方のナショナルセンターと分裂・対立している多くの左派労組に呼びかけた。核戦争の危機と、非正規労働での労働者の生活の危機の時代に、「君たちはなにをしているのだ」と。統一とたたかいなしに、労働者と労組は、本当に生き残れないのだと。

最後に十だ。

今年は八十年前も前の戦前に書かれた吉野源二郎の「君たちはどう生きるのか」が話題になり、本屋にも新版で売ら

れている。時代が戦争に入るとき、十五歳の少年、コペル君の「人らしい」生き方を問う作品である。

これと同じ世相からか、時代の反映だろつか、ノーベル賞受賞のイシグロさんも言っているが、時代は民族の分裂と憎悪の時代による戦争の、わけても核戦争の危機に入っている。まさに若者だけでなく全人類が「君たちはどう生きるのか」なのである。

答えを出そう。それぞれで。方向は平和に生きる権利の獲得だ。明ける二〇一八年は、「権利のための闘争」を書いたシェーリングの生誕二百年の年である。

彼は、自ら虫けらになるものはあとから踏みつけられても文句は言えない」というカント哲学の言葉を引用し、その著で、すべて権利と法はたたかいによって獲得される」と人類の権利の大原則を語る。たたかいなしには、生きる権利は獲得できない。核戦争と非正規の「問答無用」の時代なのだから。

最後に、執行委員会と編集部から、この一年の「未来」のご愛読に心より感謝申し上げます。来年もどうかよろしくお願いたします。